

---

# MOON-4 夜叉 2 < 1 5 >

みづき海斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 2<15>

### 【Nコード】

N9757M

### 【作者名】

みづき海斗

### 【あらすじ】

和人を失くした秀は桜と榊の元にいた。『記憶』の断片を辿るがどうしても思い出せない『何か』がある――

MOONシリーズ第4弾 『夜叉』 3話目です。

### 3・秀・4（前書き）

突発更新です。

### 3・秀・4

「秀！」

白いドレス姿の桜が2階の寝室から駆け降りて来た。「何処へ行つてたの？元気になった途端こうなんだから。」

半分泣きそうなおどけない表情で、秀の胸に飛び込む。

「また、いなくなっちゃったかと思った。」

「それはさせないよ。」

榊は2人を見つめ、「俺が監視役だから。」

「やつぱりね。」

秀は溜息をつき、胸元の桜に視線を降ろした。

新宿の、何処かもしれない洋館での会話。

この街の中で、桜が貼った結界の中にある洋館。

「お茶の時間なんだろ、桜。」

秀が言うと、

「そうよ！今日はアップル・パイを作っておいたわ。庭にね、薔薇がさいてるからそれをちよつと入れてみたの。」

「美味しそうだね。」

秀は答えた。そして、桜を胸元から離し、

「いいよ。お茶の時間に付き合うよ。」

「やったわ、榊。さあ、午後のティー・タイムよ。」

桜は白いドレスの裾を翻し、踊る様にしてリビングの奥にあるキッチンへと向かった。

「お前も桜の『我がまま』に付き合わされている方だろ。」

「我がままじゃないよ、桜は。自分の気持ちに正直なだけ。」

秀の問いかけに榊は何事も無い様に答えた。

「ここなら安全だから、秀。」

午後のティー・タイムで桜は薔薇の花弁を浮かべた紅茶を飲んで

いた。「だから、私に黙って『外』に出ちゃだめよ。」

「はいはい。」

アップル・パイを食べながら秀は空返事をした。

その様子を見て、榊がくすり、と笑う。

「何だよ。」

「何でもない。」

「変な奴。」

と、言ってコーヒーを一口飲む。

ブラジルのブラックだった。

「・・・・・・」

秀は暫し沈黙した。

（味が違う。）

心の中でそう呟く。（あれは、誰が入れたコーヒーだろう・・・

・・・・）

微かな『記憶』を辿る。

「どうしたの？秀。秀はコーヒー党でしょ？」

「ああ。」

思い出せない『記憶』を脳裏から消し去ろうと、再びアップル・パイを頬張る。

「おいしい？」

楽しみにソファの向かい側に座る桜が尋ねる。」

「ん。まあまあ。」

秀がそっけなく答えると、ソファの隣の席に座る榊が、

「秀の『まあまあ』は美味しいの略語だからね、お嬢。」

榊もコーヒーを一口飲む。

「でも」

向かいの桜がふいに真面目な顔になり、

「本当に一人でここから出ちゃ駄目よ。もし『帝王』に見つかったら『狩られる』から。」

「判ってるよ。」

胸元からセブン・スターを1本取り出し、火を付ける。「『あの夜』俺を帝王から助けてくれたのは桜だからな。」

「ええ、そうよ。」

桜は力強く頷き、「『帝王』は真の『闇』の心を持つてるわ――もし、<sup>ウルフガイ</sup>狼男一族の誰かが残っていると知ったら、必ず『狩り』に来るわ。」

「・・・・・・」

秀は少し横を向いた。

『帝王』。自分の一族を根絶やしにした者。

あの紅の満月の夜、自分は『帝王』に殺される所だった。

それだけが、秀の記憶の中にある。だけ。

どうして、今日、青山に行った？

『Office To One』の事は心の何処かに残っていた

――だけど、自分は3カ月前『誰か大切な人たち』を失った。

それ以上は、思い出せない。

「秀。体の具合が悪いの？」

心配そうに桜が自分の顔を覗き込む。

「・・・・・・別に。」

タバコを吸いながら、秀は相変わらずそっけなく桜の問いに答えた。

<sup>ウルフガイ</sup>「狼男って無愛想なのね。」

少し頬を膨らせて、桜が言う。

「仕方ないよ、お嬢。」

榊は彼女に向かって微笑み、「それが『本性』なんだから。秀を手なずけるのはまず不可能だと言ってもいい。」

「大丈夫！」

榊に向かって、「榊は優しいもの。いつか秀だって私たちの本当の仲間になってくれるわ。」

「『おままごと』は嫌いだぜ、桜。」

白い煙をふかしながら秀は、「俺はいつでもフリーの狼男。ウルフガイ。いくら『闇』の者でも『帝王』でもそう簡単に尻尾振ったりしないぜ。犬っコロじゃないんだから。」

「私、秀のそういう所が好きなの。」

桜は微笑み、「だからずっとあなた欲しかったのよ。」

「勝手に言ってる。お前さんの相手は」

と、傍らのスーツ姿の榊に視線を送り、

「ここにちゃんといるだろうが――な、榊。」

「榊は別格。」

桜は微笑んで、「榊はずっと私の側にいてくれるんだから。秀も好きだけど、榊は私にとっては別格なの。ね、榊。」

「ああ。」

桜のあどけない微笑みと問いかけに、「桜は大切だからね、俺にとっても。」

「・・・・・・」

秀はそんな自然なやりとりの2人を見て、

タイセツ ベツカク

自分にもそんな存在がいたような気がした。

### 3・秀・4（後書き）

また別の小説考えなきゃ（―¥）。。。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9757m/>

---

MOON-4 夜叉 2 < 1 5 >

2010年10月10日01時27分発行